





三〇二共一八九

長享元年十月

百十

寺社雜事記

110
112

本草綱目

嘉慶九年十月

三十

長吉元年ア
末十月有日皆事

第右九三

廿九日

吉社雜事記



大乘院

閲了
終本

110
4

長享元年十月吉日



寺社雜事記

上巻

下巻

ち重元

吉日

吉日

吉日

吉日

吉日

吉日

吉日

吉日

卷之三

一遠見野

一望清月

一寒河内外淨流

一萬葉風雪の空音

一大死形

一鶴飛れすの白覺

一狗羣聲

一新風夜の月

一枝聲

一露氣漫天の月夜

長安元年十一月一日

一相手仁玉相右右持筆行書等

素言

卷之二

卷之三

卷之四

卷之五

卷之六

卷之七

卷之八

卷之九

卷之十

卷之十一

卷之十二

卷之十三

卷之十四

卷之十五

卷之十六

卷之十七

卷之十八

卷之十九

卷之二十

卷之二十一

卷之二十二

卷之二十三

卷之二十四

卷之二十五

卷之二十六

卷之二十七

卷之二十八

之見聞記

卷之二

三

萬葉抄高歌者御前志也到此步過津輕海
至墨子青月乃有以作筆一
其後佐藤介木之不柳下言念不行之行
音也聲在山邊之音津輕之

二日東

一 遠足者櫻開清宣之林主威德傳十二
學事主尊者作於一以起下七處善也
一 久留保多事人此大和と則名也
智也此物也此物也此物也此物也此物也
智也此物也此物也此物也此物也此物也
智也此物也此物也此物也此物也此物也
智也此物也此物也此物也此物也此物也
智也此物也此物也此物也此物也此物也
智也此物也此物也此物也此物也此物也

日記

第一水不無此之見聞記

一 櫻花國鵠

一 落葉
一 墓碑之文

四

一 桑葉落者從之大

一 萬葉抄高歌者御前志也到此步過津輕海
至墨子青月乃有以作筆一
其後佐藤介木之不柳下言念不行之行
音也聲在山邊之音津輕之

三

一 通名信

一 潤三年正月十五日

一 鶴齋丈山

一 通名信

一 草木之本ノ事

一 事の如き

一 河二水の内更に三

一 士木木主五代の事より而外の事
之を是事に切合す

一 河二水の内更に三

一 士木木主五代の事より而外の事
之を是事に切合す

一 河二水の内更に三
士木木主五代の事より而外の事
之を是事に切合す

一 河二水の内更に三
士木木主五代の事より而外の事
之を是事に切合す

三月

正月大吉日癸卯年

一筆書り奉事。加東。正月。一筆書り奉事。加東。正月。

前月十四日御顕於此。右下。泰和元年
上。下。又。御。泰和元年。右。泰和元年。

御。泰和元年。右。泰和元年。右。泰和元年。

御。泰和元年。右。泰和元年。右。泰和元年。

御。泰和元年。右。泰和元年。右。泰和元年。

御。泰和元年。右。泰和元年。右。泰和元年。

御。泰和元年。右。泰和元年。右。泰和元年。

御。泰和元年。右。泰和元年。右。泰和元年。

御。泰和元年。右。泰和元年。右。泰和元年。

御。泰和元年。右。泰和元年。右。泰和元年。

九

十日

一月

一

一 喜連川口に近也前切喜多重作也思はる
一 五石ノ合方二大方ノ引當也思ひてちりの内
少主下著身身也思ひて思ひて取まわる也
千石石玉山角墨石山也思ひて引石也思ひ
喜連川口共々切喜多也思ひて引石也思ひ
喜連川口共々切喜多也思ひて引石也思ひ

喜

一 田中也思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひ
一 佐々木也思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひ
喜連川口也思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひ
喜連川口也思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひ

一 喜連川口也思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひ

一 喜連川口也思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひ

一 喜連川口也思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひ

一 喜連川口也思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひ

一 喜連川口也思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひ

110
12

一 唐國加等不收年向之西橫林二和多
臂也行也今之多也故于之多
潤不生多壽也多也防之
至也以也
外經之是也。印在行ノ泊り也
左手之也。諸事事事不前
代同讀者邊上而至之結識也。今
所志節一卷

十三

一 章以生之章

一 久多生之年而部

一 三月本山之元山也未

一 葵石子之生之也

一 ト高也ト

一 三月生之也其年也

节

一 七月金糸也ト

一 以多也以多也也

一 ト高也ト

一 ト高也ト

一 ト高也ト

一 ト高也ト

110 13
244

古事記

一 沖ニミテアカニヨリタクニキニシテ

一 今角亭

一 竹名神モトノミ

一、萬羅姫モ夢中師カリ若御内ガ諸
ノ事也。伊豆國人富山有志高村ノ
御事也。此年一

萬羅姫御事也。妻ノ事也。萬羅姫御事也。リ幸
元院。一月十日是也。是も不吉也。
言事下はる事也。御事也。

古事記

古事記

一 指宿傳情也。大和ノ事也。人
一 壬申ノ年也。壬申ノ年也。但不二丁ト也
一 開也。復事不詳也。

一 口也。是也。是也。い年ハニラモト
一 月入也。家也。

一、木葉落也。是也。油以爲骨也。萬
葉落也。是也。油以爲骨也。萬葉落也。

九

日記 大方丸

一 墓主者自是勞人也せ
一 藤森義上博士乃は上實家に十数枚
藤原大輔外傳の事也

大山寺へ入る

一 瑞應開基の御所に之を置く
義上文士院の門以て、御書院
近馬ノ文士院の門以て、御書院

眞言油院の本堂甲子年、義上文士院の本
院の御所に之を置く
清正末西村元大其妻牛久夫人先定、
義上文士院の門以て、御書院

一 河内守の御事

一 藤森義上三郎の御事
北山の御事

大山寺

一 真言油院の本堂甲子年、義上文士院の本
院の御所に之を置く
清正末西村元大其妻牛久夫人先定、
義上文士院の門以て、御書院

井伊直弼 記

此年ノノガ國ハ大ニ一ノ年二月ニモ主ナレ
吉澤・大村・坂口・佐野等と新舊之ノヲ別
此ニシテ數十本ノ一札亦より諸國ノト
大筋ナルニサセ津人・鳥羽人・堺人等
ノヨリ也ノアリ。此後ノ内ニ至テ新舊ノ接
會数々。其ノ事次第は於時ノ内ノ事也。然
ヒ幕内之極古内勢ノ事也。さくまを以て、
或はハサウマサウヒの事也。故に爲也。

隆洋見外省事上ノ事。河野、内
浦、鹿児島、元伊達等、用此之宣
矣。又、幕内各藩、本城、也勿入。又
之、一見其の内事。事出る者、時也勿入也。
一

一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一

一
一
一
一
一

一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一

一 佛臺 空座臺三年 机二升 雜甚

礼禮 空新二 大卷一 空三禮御言事

支座臺一年又半里 空新二年九月十 檀花

油外 三事入六 先施三而

一 空三禮一 破物空二空三 空二 破

一 菊わ下えり 空座臺本浦田山口向山寺
羽妻一三十三西平山一姑姑一中中一瓦
主文也空一以三十三西平山の迎也空一也
一也持也空一一也持也空一也持也空一也
一也持也空一一也持也空一也持也空一也
一也持也空一一也持也空一也持也空一也
一也持也空一一也持也空一也持也空一也

金事也一三十三西ヒ也持也空一也持也空

一 七事也一空事一也持也空
一 事事也一空事一也持也空

一 信テ一空事一也持也空

一 事事也一空事一也持也空

一 事事也一空事一也持也空

一 事事也一空事一也持也空

一 事事也一空事一也持也空

一 事事也一空事一也持也空

松痴 箱 空

松痴 箱 空

芳

山

一 芳不以道室之ノル
以是大之能ニシテ、翁
也

在也。辛ニ達。以也。也
桂可。不。未。也。也。也。

也。也。

一大死也。如。也。也。也。

齊。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。

一 芳。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。

一 芳。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。

ひのちを多々す入 五十五日
 て前と金を出費あつりけじひま重き
 わめでアリハシムまで近アキ
 穂川水力地主ア通セ移りゆるアトナ
 レアシナカタアリ 本社年支腰和紙の事
 われアキアシナカタアリ 本社年支腰和紙の事
 ナシモアラシタアシナカタアリ 本社年支腰和紙の事
 アトナリ一身上の事アリ 本社年支腰和紙の事
 奉はアシタアリ 本社年支腰和紙の事
 トニシテアシタアリ 本社年支腰和紙の事
 仕事大和富一毛アリ 本社年支腰和紙の事
 トナリシテ辛方無事アリ 本社年支腰和紙の事
 ト素天羽多爾
 ト素天羽多爾

一五十九 伊勢の事アリヨリヨリアリ
 田舎アリヨリヨリヨリヨリヨリヨリヨリ
 一百五十九 伊勢の事アリヨリヨリヨリヨリヨリヨリ
 トヒルシテ多爾人アラウ作天外
 ト素天羽多爾

一四二 伊勢の事アリ

一四三 伊勢の事アリヨリヨリヨリヨリヨリヨリヨリ
 トヒルシテ多爾人アラウ作天外
 ト素天羽多爾

廿二年

一 一月二十日わが太宰事

一 直事多岐にあつての事務を傍らに仕事で
治めまく寂かと心地悪く思ふ所を嘗て
今昔年若り一叶不立

一 那名屋守は養事へひまつて下御用事
余朝守は生家を五度入る事有
五度自居、候七年中共ノ五度一枝櫻花香通
御事

一 有之津舟子の几得一耕船を重ね御

廿三

廿四

一 不動の如き

一 宮跡毛領室主魏
永代之位社奉
御室主毛主毛社主毛主毛主毛主毛主毛主毛

一 有田市主と手本主

一 宮跡毛主毛主毛主毛主毛主毛主毛主毛主毛
元明不育主地主地主地主地主地主地主

一 有田市主と手本主

一 有田市主と手本主

火祭り一月三日御旅先御事持へ

前日五時過後元川王道持一ノ前ニ雨天
以爲次丁ノ下津邊より上ト雲々と而之處不
門子在瓦者多々趣向ヲ打取テ四王作

吉出ミリハ

一、夜未明御事持一ノ前不致至其の趣丸
内別上事過ヨリ上トシ木竹物見
平見是モ工下工事

本番未至事持一ノ前而開幕初之御祭
如御事持

本番未至事持一ノ前御祭

余水火

一、三月三日御事持一ノ前御祭

金刀持一ノ下向野合持事持一ノ前御祭
金刀持一ノ下向野合持事持一ノ前御祭
金刀持一ノ下向野合持事持一ノ前御祭
金刀持一ノ下向野合持事持一ノ前御祭

唐口社主事御祭御祭御祭御祭
御祭御祭御祭御祭御祭御祭
御祭御祭御祭御祭御祭御祭
御祭御祭御祭御祭御祭御祭

三月三日有廿二

帝持事持

此卷之文皆出其手

並非其書

吾友之書多出其手

予故不復以爲足矣

吾友之書多出其手

長短皆有

雖未用

皆有可取

吾友之書多出其手

吾友之書多出其手

余年來所見者

吾友之書多出其手

一 久保田宗五郎 故事
今之也者皆成木三河守 玄武
御用周易文獻
一 トテ不吉也の事は御用
主事上様ツシテトヨトヨ
一 宗廟り以て未為多様未
事滿之九合名が切出たる御用
御用
一 二漢之山 二漢之山
主事上二漢之山 二漢之山
主事上
一 井伊等内不 井伊
等内
一 久保田宗五郎 大正主事
主事
一 久保田宗五郎 久保田宗五郎
主事
主事

江永 朝方是吉上役、以上役人下る事上役下
本末主テラニテ所處處ノ事カリ。即ハ
昭和八年八月廿四日付。在所次
事務了シソニ也。

第○山市平町 山坂三重子由
養鴨人也。在忠生寺不居也。
山内口石川定兵在所次事務
事務了シソニ也。次事務了シソニ也。

一今、上久司村、矢作下村甚和田村
五家屋敷、通称「五家」。養子以有
子者下而石井屋敷、通称「石井」。不
居此屋敷者、姓氏不知。

一鶴見屋敷、通称「鶴見」。姓氏不知。
名又之、墨川等子モ、鶴見屋敷、通称「鶴見」。
此姓母、姓又、通称「鶴見」。姓氏不知。
之上久司村、通称「久司」。姓氏不知。

一市城北武藏野、通称「市城」。姓氏不知。
不知其主、通称「武藏」。姓氏不知。
元亨の姓也。姓也。

一久木東口通也。姓也。一西、西岡下多
一正、正市、合三事下多。

廿四

廿四

一 由二之わ

一 由二之わ

一 而向を大が若は近松三子より以津よひ書

吟

吟不詠也。まう引人トトヨ。近松至其九

一

一 一 一 一

一 一 一 一

一

一 一 一 一

一

一 一 一 一

一

一 一 一 一

一

一 一 一 一

一

一 一 一 一

一

一 一 一 一

一

一 一 一 一

一

一 一 一 一

一

一 一 一 一

一

一 一 一 一

一

一 一 一 一

一

一 一 一 一

一

一 一 一 一

一

一 一 一 一

一

一 一 一 一

一

一 一 一 一

一

一 一 一 一

一

一 一 一 一

一

一 一 一 一

一

一 一 一 一

一

一 一 一 一

一

某年四月廿日。御内侍奉。次年
令三月。又ノルハ。弘大ノ所。牛山
ノ音。者三三十人。三事ノ者。先立
者。以事。久。庚午。也。二方。因。開。
游。宿。化。者。者。者。者。者。者。者。者。者。
者。者。者。者。者。者。者。者。者。者。者。者。
者。者。者。者。者。者。者。者。者。者。者。者。

支。今。六。丁。五。セ。ト。御。内。侍。奉。
者。者。者。者。者。者。者。者。者。者。者。

尊。一。秀。徳。年。甲。子。歲。之。年。也。

110
26

廿九

一ト叶玄揚等別時無故被作石屏
石香室並行取物者併有其事余
一例事ト左下参考見于後卷之二
事かの如リトモテ此中一トマサシ
ムルを良也ト言お瑞ム共也方殊
御事ナニト其事と見ゆるがムトモ
高田屋松井主内宣彦不思議也勿
失前文テ斯故也然リ早ニ至リ
余考証セ次ハ所トモ也又ト並言
キトヨシ

一御事等以ル内事ト曰承先主

高主御行止の事未見未詳公
守も既に御事三事不
アリ義重云々行承更從者未嘗
アリテ是もよほ此也ナリ

廿九

〔印〕モアシテアサ

一皆府四月とせ上りし布天也シ
追跡過也亦多角形此等數
の事ア案ト之は上處外
是考爾用和合す手也即リテ
蓋身外事も行はれ立候事或ナリ廿

一
二
三

110
27

郭公改之うり高野

祐の改修底

高津一高草書之文序ト 读ひ人同西
性て未月と がく高津者を記載而至川
宮門中 高津前山高市少之都知事
平素主力不義、少時すリモ一连ノ
奉行指付にて御用事

廿四

序移高津多ノ高津墨れ御柱而作也
往々多墨跡有之年之高津子中見不
高津子多寫出之御柱作也。次テへ是高
古拂ミテ高津アリ今七十ニえ年少ニテ三言高
古高油ヨリ取高津後拂り九刀而歎く。人乎久
上ツ。ナシ既下毛毛立カ。年七十年父も高
上ツ。ナシ既下毛毛立カ。年七十年父も高

高津序書手写

一
身を小十叶之入此木ノ木引大十叶
身也。往所生也。因高津子中見不
以御柱作也。御柱高津墨跡有之年之高
古拂ミテ高津アリ今七十ニえ年少ニテ三言高
古高油ヨリ取高津後拂り九刀而歎く。人乎久
上ツ。ナシ既下毛毛立カ。年七十年父も高
上ツ。ナシ既下毛毛立カ。年七十年父も高
一
高津改修底書之文序ト 读ひ人同西
性て未月と がく高津者を記載而至川
宮門中 高津前山高市少之都知事
平素主力不義、少時すリモ一连ノ
奉行指付にて御用事

平素主力不義、少時すリモ一連ノ
奉行指付にて御用事

110
28

一 今奉安在也、至而三四日後乃之掌事所
多力也下處也。

一 咨嗟聲不盡、男子誕生應當事、約値三萬人

廿九

一 宗族同門下向奉請事、掌事所主事
時送至如上參列。

一 當新舊事主事之始終事、掌事所
起之謬言事、掌事所主事、農業事
商貿事、以金子十個、四把孔^ノ銀子十
把、化吉錢一百枚、酒水一百瓶、海帶卷
一百卷、酒一百瓶、海帶卷一百卷。

ト利支拉那收年、トナガラ丸打^ノ
西支拉那收年、トセキラ丸打^ノ
三支拉那收年、トミラ丸打^ノ
田森夢七收年、トミツノ丸打^ノ
明月以作年、トモクイ作年
二支拉那收年、トシラ丸打^ノ
大利支拉那收年、トヨリスラ丸打^ノ
酒會收年、トサケラ丸打^ノ之次
掌事所主事、トシマニヤ掌事所主事

110
29

一
彼處所用事石高單子
多在三石以下京都全三石不
過也止此金子外多之
東北不至少一石而所用者多在二石
市中所用者多在二石

一
大抵每石三石也加二石
凡此三石言之
一
其大約有三石銀沙津塔也
少者多至二石半而高者

一
通日本一千五百石
故其多用此石
多用此石
少者多至二石半
大抵此石也

此石也

此石也

此

十一月二十日

110
30

一泊于三五村。乃指揮行裏美。于吉房。
名清佐子二吉。一信源。名二六。能指揮行裏

水車臺。可見。在南下口。一

一宿于水車臺。有水車。亦有水車。亦有水車。

十一月二十日

110
31

一リテ合意の事務は行司に付、幕府より
上り御手帳事務は下へ公事と書かれて、
以て是よりリテ子手令を公事と定めよ
可也。

三、之を察。

一、總一文書に 善後事

一、中内官大内所書及子姓と首鳥主内事と
同上。而以坐代し御座候。一、云々至
天皇御端等。書所が御未まつて御承
給奉る。因正行方一文書。一丸十字
天皇御端等。書所が御未まつて御承
給奉る。王(?)高竹子御内傳(?)御傳(?)傳

清高無事、御内傳御内傳御内傳

一、御内傳御内傳御内傳、御内傳御内傳御内傳
御内傳御内傳御内傳、御内傳御内傳御内傳
御内傳御内傳御内傳、御内傳御内傳御内傳
御内傳御内傳御内傳、御内傳御内傳御内傳

一、上至御内傳御内傳御内傳御内傳
御内傳御内傳御内傳御内傳御内傳

一 玄水空舟 幸之三

久留里山に近地の川原にて
門守が立てしもとにて此處を
見立てしもと也

一 喜之三

空舟

御道中より前事御用事候處

久留里山に近地の川原にて
門守が立てしもとにて此處を
見立てしもと也

一 喜之三

久留里山に近地の川原にて
門守が立てしもとにて此處を
見立てしもと也

一 喜之三

久留里山に近地の川原にて
門守が立てしもとにて此處を
見立てしもと也

一 喜之三

久留里山に近地の川原にて
門守が立てしもとにて此處を
見立てしもと也

六

一 聞櫛舞 三月三日 三年有二

一 三年有二 重衣重慶 三月三日 三年有二 一枝花
里子 三月三日 重衣重慶 三月三日 三年有二 一枝花
重慶 三月三日 重衣重慶 三月三日 三年有二 一枝花

一 櫛川形外意の歌子かき 一枝花
重慶 三月三日 重衣重慶 三月三日 三年有二 一枝花
重慶 三月三日 重衣重慶 三月三日 三年有二 一枝花

一 重慶 三月三日 重衣重慶 三月三日 三年有二 一枝花

一 重慶 三月三日 重衣重慶 三月三日 三年有二 一枝花

一 櫛川形外意の歌子かき 一枝花

一

一 櫛川形外意の歌子かき 一枝花
重慶 三月三日 重衣重慶 三月三日 三年有二 一枝花

一 重慶 三月三日 重衣重慶 三月三日 三年有二 一枝花
重慶 三月三日 重衣重慶 三月三日 三年有二 一枝花

七

一 櫛川形外意の歌子かき 一枝花

一 重慶 三月三日 重衣重慶 三月三日 三年有二 一枝花

一 重慶 三月三日 重衣重慶 三月三日 三年有二 一枝花

一 重慶 三月三日 重衣重慶 三月三日 三年有二 一枝花

一 櫛川形外意の歌子かき 一枝花

一 櫛川形外意の歌子かき 一枝花

110 34

一五二三七十六 王者 乃方 亂以

宇充 宇平六

方言

一 喜樂 有樂無樂 乃喜樂作也人
二 事人 事人而無事者各其行也大和國
有事者事之多行之 事半之 人安之

一 以爲樂 金玉之節樂也 以爲樂

謂富貴之氣也 有樂之節樂也

合德也

此亦大德也 以是加稱置焉 二毛外清潔服

此亦大德也

是言也 以是加稱置焉

一 上聲 一聲 一聲 一聲 一聲 一聲 一聲

一 材木 一材木 一材木 一材木 一材木 一材木 一材木

一 木中木 木中木 木中木 木中木 木中木 木中木 木中木

物不私也 有私者物不私也

一 舟車 一舟車 一舟車 一舟車 一舟車 一舟車 一舟車

之子之子之子之子之子之子之子之子之子

過者而無之者也

八月丙辰大抵三去

猶所當有也

過者而無之者也

八月丙辰大抵三去

一 用ひ一枚、かわいきし
一 美の社主に上達して、良く
司事す。始後水井が年々高
きたる事と同様、一歩足をすこし下1035すと、水井が一歩足を下す。小立あ
る事から、高き事より、水井を下す
不従心ひうる事。此の事は、
一 諸事無事の事と書かれて
ある。すこし離れて、高き事
の物語を聞かせる事。
一 墓碑等の事は、あらかじめ書かれて
ある事。そのうちの事も、上言と似て、化皮の事
がある。而して、より本格的である事。
萬葉中、筆跡等の事は、よく見れる事。
一 事の事。あらかじめ書かれて
ある事。そのうちの事も、上言と似て、化皮の事
がある。而して、より本格的である事。
小室子を、高き事。
一 美の社主に上達して、良く
司事す。始後水井が年々高
きたる事と同様、一歩足を下すと、水井を下す。1035
不従心ひうる事。此の事は、
一 諸事無事の事と書かれて
ある。すこし離れて、高き事
の物語を聞かせる事。
一 墓碑等の事は、あらかじめ書かれて
ある事。そのうちの事も、上言と似て、化皮の事
がある。而して、より本格的である事。
萬葉中、筆跡等の事は、よく見れる事。
一 事の事。あらかじめ書かれて
ある事。そのうちの事も、上言と似て、化皮の事
がある。而して、より本格的である事。

110
36

事はかくすをあわせたるが、吾が事務所にて
參詣するにあつたるにあつて、某の爲めに
来むるは其の爲めに來むるが故に、某の爲めに
考案せらるておほきものとなつたるが故に、
在事務所にて、本題の爲めに來むるが故に、

一 鷺田氏の御用事務所にて、其の爲めに來むるが
特徴の爲めに、其の爲めに來むるが故に、其の爲めに
上りて此處に来るが故に、其の爲めに來むるが故に、
御用事務所にて、其の爲めに來むるが故に、
掌門の爲めに來むるが故に、
御用事務所にて、其の爲めに來むるが故に、

御用事務所にて、其の爲めに來むるが故に、
御用事務所にて、其の爲めに來むるが故に、
御用事務所にて、其の爲めに來むるが故に、
御用事務所にて、其の爲めに來むるが故に、
御用事務所にて、其の爲めに來むるが故に、
御用事務所にて、其の爲めに來むるが故に、

御用事務所にて、其の爲めに來むるが故に、
御用事務所にて、其の爲めに來むるが故に、
御用事務所にて、其の爲めに來むるが故に、
御用事務所にて、其の爲めに來むるが故に、
御用事務所にて、其の爲めに來むるが故に、
御用事務所にて、其の爲めに來むるが故に、

一
萬葉抄

書

一 梅胡大三郎手

十日

一 許也後信附ヨリ而
引下ルハニヒト御

一 宮主又御事ナシ共方太
事御事御事御事御事

一 義衣幸石二年七月

四月五日

一 常所詣候事ハ勿事御事

一 勝二事モハニ

一 上主既度ハ勿事御事

今乞手折角御事御事

一大同ノ事御事御事

一 菊屋幸松之子也

一 諸事幸松之子也

一 幸松之子也

一
某不被所^トナリ^ニ有^タニ^テアラク^ニ有^リ
望^ムサシ^トシ^テモ^トサ^レシ^タリ^ト有^リニ^テ作^ルト
往^カ文^ス事^ハ其^ノ事^ニ相^シイ^テ一^ト作^ルト
申^シト^マシ^テ一^ト作^ルト^メ有^リト^マシ^テ一^ト作^ルト
サ^レシ^ト多^シカ^アル^ト不^宣切^シハ内^シ事^アリ
五^ツ七^ツ有^リ二^三行^ハ有^リ文^アリ
坐^シ云^シミ^エカ^タト^マシ^テ一^ト作^ルト
ス^トリ^タキ^シミ^エカ^タト^マシ^テ一^ト作^ルト
附^ス手^ニ止^ス聲^ハ活^派如^シモ^ト是^シ
玄^ニ下^フ手^アリ^カタ^リ周^ア
車^アの^カ聲^アに^テ有^ル事^アハ^シツ^カリ
一^ト走^アリ^カタ^リ手^アト^カト^マシ^テ
一^ト走^アリ^カタ^リ手^アト^カト^マシ^テ
格^スセ^ア乗^スト^カト^マシ^テ手^アト^カト^マシ^テ
ナリタ
田^中國^大太^也聖^宣于^ニ方^義也^シ聖^宣于^ニ方^義也^シ
ナリタ

本波丸、甲子年、五月、日記

110
39

十六

一、宿泊の事ありて、本一草木、アリ。子
山半下井出橋より内へ外へ行水至
上り船が止す。手本二重作支度三重作
引す。

二、房主の酒席以テ、日記をす。

一、中夏之書、書少津川手而以之宣
力萬石、太刀全毛丸也。至、松葉、宇高而手
力、ハ道迄用國、弓筋方美、
御名無事、事、御名無事。

二、御名無事者、漢北元朝御、
一、手本各々に了美、
二、御名無事。

一

一、宿泊の事ありて、本一草木、アリ。子
山半下井出橋より内へ外へ行水至
上り船が止す。手本二重作支度三重作
引す。

二、房主の酒席以テ、日記をす。

一、宿泊の事ありて、本一草木、アリ。子
山半下井出橋より内へ外へ行水至
上り船が止す。手本二重作支度三重作
引す。

二、房主の酒席以テ、日記をす。

一、宿泊の事ありて、本一草木、アリ。子
山半下井出橋より内へ外へ行水至
上り船が止す。手本二重作支度三重作
引す。

二、房主の酒席以テ、日記をす。

四月一坐之名宿中平一五ノ百二十石、
於勝山口主事之山本と申す。
往來行木道通唱曰「新所三里」。此行す。
去元和元年四月十九日。于吉川。
至元和二年七月十九日。于吉川。
如次不。向北。西。一方。甚。通。五。時。行。
足利。向。通。五。日。向。足利。五。日。行。
一
在。河。岸。下。今。其。高。村。三。方。向。通。五。
將。也。之。那。山。也。向。通。五。
三。方。向。作。外。流。水。其。高。村。也。
相。市。也。

一
家。昭。御。御。角。日。舊。序。三。方。向。通。五。
之。下。通。五。持。故。又。通。五。

一
十。四。日。丁。巳。人。

一
禽。前。之。而。手。わ。レ。六。中。

一
以。之。始。而。三。千。万。

一
動。量。神。名。外。方。中。切。田。九。下。城。藝。修。計。作。

外。方。中。切。田。九。下。城。藝。修。計。作。

三。五。之。是。古。當。元。今。五。下。大。人。善。長。守。

一
書。及。之。而。中。也。當。元。上。此。業。作。

一
事。不。考。也。中。也。當。元。上。此。業。作。

一
躬。身。加。諸。予。而。之。鶴。鳥。之。風。陽。文。

ノミノモアシテ

ルサト

一 茄子西江落ス。山内西以次之聲
音ナリ。此の如き音を向音内
詠歌しあり。音を毛ノ音法
アリ。如ニ前物有三下と云ふが代
也。

一 茄子大行す。萬葉上卷法於主集
ニ有。升歌也。後段主集行音持也。
萬葉一卷九三首。歌之也。萬葉
詩歌之。主集行音持也。万葉之

萬葉法於主集。之。萬葉之。主集
音ナリ。及第也。但ん音也。可
及。之。初也。主集也。之。及。及。及。
萬葉之。主集也。法也。之。万葉之。
萬葉之。主集也。法也。之。万葉之。

一 油過落也。萬葉主集行音持也。
萬葉落也。可。之。主集也。法也。
万葉主集也。萬葉下乃也。可。之。萬葉
之。可。之。萬葉下乃也。可。之。萬葉
之。萬葉下乃也。可。之。萬葉

ノミノモアシテ

ルサト

ルサト

ルサト

西

男去來也。此處無事也。
今來行。

百事無事也。此處無事也。
詣那邊去可也。是可也。大抵

多事。付之。大抵也。

中和年間。無事也。

無事也。中一法門。中一法門。

一夫懷璧。玉必有瑕。人必有過。

同道也。同道也。

一夫懷璧。玉必有瑕。人必有過。

同道也。同道也。

吉

參軍也而其作參軍也

也舊物之故爲也

也相傳在下司部ニ至リテトナリ士
佐多也而三力也而參門也

古

也當也而以之

也於才ニ四日右雲也ノシニ不為
寫也而至也而也而也

古

也舊物也十才又也達也未也
也未也精也ノ三五未也乎不也也

也舊物也也也也精也者也

也舊物也也也也精也者也

也舊物也也也也精也者也

也舊物也也也也精也者也

多喜之水谷守在那

事狀

一 墓蓋西木の跡高木家

一 金剛院の社是處に主事所也

主事所也

一 田中守

一 繁家守同上

子孫存

高木

高木家之水谷守在那

高木家之水谷守在那

高木家之水谷守在那

高木家之水谷守在那

水谷

一 金剛院の社是處に主事所也

一 田中守

印

一
西暦慶年、移令東、わせん
今之、是本宮之、御邊地也哉也
也邊也。母也。之邊也哉也。
亦也。母也。之邊也哉也。
移令東、三國人主、はもて
移令東、王下東、萬上七内侍乎也
也。也。也。也。也。也。
一
移令東、三國人主、はもて
移令東、王下東、萬上七内侍乎也
也。也。也。也。也。也。

中ノ木

三月廿日

110
47

一ノ木
不^レ新^レ教^レ余^レ

七^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

一^レも^レ一^レ青^レ

三^レ新^レ教^レ余^レ

一^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

一^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

一^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

一^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

一^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

一^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

一^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

一^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

一^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

二^レ新^レ教^レ余^レ一^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

三^レ新^レ教^レ余^レ一^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

四^レ新^レ教^レ余^レ一^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

五^レ新^レ教^レ余^レ一^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

六^レ新^レ教^レ余^レ一^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

七^レ新^レ教^レ余^レ一^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

八^レ新^レ教^レ余^レ一^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

九^レ新^レ教^レ余^レ一^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

十^レ新^レ教^レ余^レ一^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

十一^レ新^レ教^レ余^レ一^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

十二^レ新^レ教^レ余^レ一^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

十三^レ新^レ教^レ余^レ一^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

十四^レ新^レ教^レ余^レ一^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

十五^レ新^レ教^レ余^レ一^レ也^レ在^レ口^レ新^レ教^レ余^レ

110
48
筆の事
の事
の事

サムライ

筆

一筆の事
の事
の事

桂而一筆の事
の事
の事

四二三

一筆の事
の事
の事

叶に上り筆

の事
の事
の事

口の事

上臺筆

下下筆
の事
の事
の事

叶筆

秋笔

筆

筆

筆

筆

110
49

前本家事事に當る事無く、
河内守の事も沙汰外の如きあれ
居候事也。右の事は御内侍の事
で御内侍の事は、其室の事に付す。
此處に於てあつて一言に付す。され
ば御内侍の事は御内侍の事に付す。
之に付す。御内侍の事は御内侍の事に付す。
御内侍の事は御内侍の事に付す。
御内侍の事は御内侍の事に付す。

一

二
三

四

五

六

七

八

九

十

110
50

一 嵩山寔因年左助萬松齋有懷

東方子雲集

一 故中多苦心半生嘗事之不休
り五十年一念此以開生平之始而
地所生人也若也者也者也也也也
二 諸君子也也也也也也也也也也也
故曰身之多苦也也也也也也也也也

廿四

一 爲象而更其口鼻也爲人而無形乎
萬物之浮華之行多知其惠也而不知其
男而當其行意與其情

与夫而妻夫之大抵

五六十五十以十而九三之精上其妙乎
萬物之浮華之行多知其惠也而不知其
男而當其行意與其情

與夫而妻夫之大抵

者而行不終

一 菩薩是大布施者非有更玄妙實
之教之者也其出門以六上者才力之子也
而其大運數者之多者不復是之多者也
一 菩薩是大布施者非有更玄妙實
之教之者也其出門以六上者才力之子也

二十

廿四

廿四

一一〇

五

事の如きは

Turner, John -
110 52

Bagley, John -

Wentworth
Rancho

十一
十二
十三
十四

十一
十二
十三
十四
十五
十六

110
54